美作房御返事みまさかぼうごへんじ

新版 2166 2167

美作房御返事

みまさかぼう

わせ進らせて、御仏事をも諸共に相たしなみ進らすべく 候 せ給い 候 いつるに、身労なのめに 候 わば何方へも参り合 にも参り合わせ進らさず候いつること、恐れ入って候上、 のあいだ 悦 び入って 候 。今年は聖 人の御第三年に成ら いつるに、所労と申し、また一方ならざる御事と申し、何方 たま わざと申さしめんと欲し 侯 のところに、この便宜 侯 まい そうら よろこい しょろう もう ごぶつじ しんろう そうろう もろとも そうろう ひとかた ことししようにん あい そうら おんこと ご だいさんねん いずかた まい もう びんぎそうろう まい 美作房 そうら

歎き存じ 候。

そうろう

御辺へ参らすべく候いつるに、それも叶わず候。 まはたらかず候えば仰せを蒙ることも候わず、万事暗々
のである。 とうら ばんじあんあん き 候 に、安国論のこと、御沙汰いかようなるべく 候 ら ごへんまい と覚え 候 。この秋より随分寂 日房と申し談じ 候 いて、 てこの度の御世間、承らず候に、なお今も身の術無きまたび、ごせけんうけたまた。そうえで ん。鎌倉には定めて御さばくり 候 らんめども、これは参っ 蹄に 親 り懸からせ給い 候 こと、目も当てられぬことに そもそも代も始まりて 侯 。 聖人より後も三年は過ぎ行 そうろう 何事よりも身延沢の御墓の荒れはて 候 いて、鹿かせきの かまくら まのあた そうろう あんこくろん みのぶざわ おんはか さだ そうら あき おん ずいぶんじゃくにちぼう そうろう しょうにん のち さんねん す そうろう そうろう そうら もう そうろう そうら そうろう

そうら そうろう あり。しかれば墓をせんにも国主の用いんほどはなお難く せ給い 候 わぬ義を立て 候 わん、いかんがあるべく 侯 ら は 承 り候えども、不法の色も見え候わず。その上、 こそあらんずれば、いかにもこの人の所 領に臥すべき御状 これは後代まで定めさせ給いて 侯 を、かしこには住まわ 聖 人は日本国中に我を持つ人無かりつるに、この殿ばかり 候 いしこと、日興の 賜 ってあそばされてこそ 候 いしか。 候 。 うけたまわ 詮ずるところ、たとい地頭不法に 候 わば昵んで 候 い そうら こうだい 地頭の不法ならん時は我も住むまじき由、じとう、ふほうとき、われ、す にほんこくじゅう われ そうら にっこう さだ た たまわ そうら ま じとうふほう ひとな こくしゅ いろ そうろう ひと しよりよう そうら そうら そうら との 御遺言と ごゆいごん そうろう

なんず。いかでか御墓をば捨て進らせ 候 わんとぞ覚え 候 。 おんはか そうら おぼ そうろう

本師を捨て 奉 り 候 わんこと、大方世間の俗難術なく覚え ほんし 師を捨つべからずと申す法門を立てながら、たちまちに たてまつ そうら もう ほうもん おおかたせけん ぞくなんすべ おぼ

波木井殿も見参に入り進らせたがらせ給いはきいどの
げんざん い まい そうろう 候 。 かくのごとき子細もいかんがと 承 りたく 候。 しさい うけたまわ そうろう そうろう

たま そうろう いさい むね 候 。 いかんが えちごこう

御計らいわたらせ給い候べき。委細の旨は越後公に申さ

)め候い了わんぬ。 そうら

もし日興等の心を兼ねて知ろしめすことわたらせ給うにっこうとうこころが

べからず、その様、 よう 誓 状をもって真実智者のほしくわたら せいじょう しんじつちし

そうろう 御事を愚かに思い進らせ 候 ことは、法華経も御知見候え、 どの 御入堂 候 わんこと、 ごにゅうどうそうら 御不審免れ おんこと 殿も同じことにおわしまし 候 。さればとて、 地頭も申し、 じとう せ給い候 ごふしんまぬか 候。 聞こしめして候えば、 おな それがしとう もう おろ そうろう そうろう 候 らん。 某 等も存じ 候 。それにも、さこそ御存知わたら こと、 そうら 候えば悦び入って 候の由、地頭も申され それがしとう もう おも 某 等と申し、ゆめゆめ無きことに 候。今も ぞん まい そうら 越後公に申さしめ候い畢わんぬ。波木ぇちごこう もう そうら お よろこ そうろう 苦しく 候 わじと覚え 候 。 当時こそ くる そうろう そうろう そうら あからさま 一 地 に そうろう よし じとう そうろう ほけきょう 候 ようにて御墓 そうろう ごぞんち ごちけんそうら ろうそう 老僧たちの そうろう いま とうじ おんはか

寒気の比にて 候 えば叶わず 侯 とも、明 年二月の末、三月 そうら かな とうじ そうろう みょうねんにがっ すえ さんがつ

そうろう うけたまわ そうら のあわいに、あたみの湯治のついでにはいかんがあるべく 候 らん。越後房の 私 の文には苦しからず 候 。委細 承 り候 わば、まず力付き候わんと、波木井殿も候な えちごぼう わたくし ちから つ ふみ そうら くる いどの そうろう いさい そうろう

しょうりゃくそうら いかにも御文には尽くし難く候いて、し お おんふみ きょうきょうきんげん そうら かしながら

り。

省略候い畢わんぬ。恐々謹言。 こうあんしちねんきのえさるじゅうがつじゅうはちにち 弘安七年甲 申 十 月 十八 日

進上

美作公御房御返事

みまさかこうのごぼうご へんじ

しんじょう

僧日興花押